

留学報告書

スタンフォード大学 佐藤徳之

2013年11月

船井財団から支援を受け、昨年秋よりスタンフォード大学電子工学科に在籍しております佐藤徳之と申します。11月現在で、すでにPh.Dコースで一年二ヶ月を過ごしたことになります。基本的に研究している時間が多いため、皆様にお知らせするようイベントが少なく残念ですが、来年6月から9月までの期間インターンシップをすることになったので、そのオファーを得るまでの話を書かせていただきます。インターンシップのポジションを得ることが、アメリカにおいて一般的に簡単なのかそうでないのか、私には分かりません。しかし、私自身は準備にそれなりの時間を費やしたので、同じような希望を持つ人のためにこちらで報告させていただきます。

まず、インターンシップを思い立った経緯について簡単に述べます。私は以前より研究職への希望を持っており、企業の研究所もしくは大学で職を得たいと考えておりました。未だ迷っている途中ですが、ひとつの選択としてアメリカの企業の研究所へ入る道を調べていたところ、ある結論にたどり着きました。コネです。とはいえ縁故採用などを指しているわけではありません。アメリカ社会を形容する際、実力社会という人もいればコネ社会だという人もいます。私はどちらも正しいと思います。アメリカの大学院入試において、推薦状が多大な影響力を持つように、就職の際も推薦が大きな助けになります。推薦者から実力を認められている人物を採用したほうが、より企業にプラスになるという考えです。例えば、ある米国の技術系企業では、社員によって推薦を受け入社した人物が一定の実力を示せば、推薦者である社員にボーナスが与えられるといった徹底ぶりです。逆に、推薦された人物の実力にも推薦者も責任を負うことになり、結局のところコネを得るためにまず実力を示さなくてはなりません。

さて、そのコネを得るための最たるチャンスこそが、インターンシップということになります。企業側からみても、インターンシップは就職希望者をふるいに掛ける機会となります。例えば、私がインターンシップをするI社においては、入社する人数全体の60%をI社でのインターンシップ経験がある人物から採用することを目標にしているそうです。以上のような理由から、コネ作りと経験値アップのために、来年夏期間のインターンシップに応募することに決めました。

決断の後はじめにしたことは、I社で働いているラボの卒業生を探すことです。コネが近道です。しかし、残念なことにそのような卒業生はおらず、渋々一般の採用枠から応募することにしました。応募の際に必要なだったのは基本的にはrésuméのみでしたが、経歴を示すだけの履歴書とは違うので、自分が何を出来るのか示すことに重点を置きました。例えば、電子線描画装置の経験があり、〇〇のプロジェクトで〇〇のような成果をだしましたとか、Labviewというプログラムで〇〇の測定系を組んでいます、といった内容をなるべく具体的に書くようにしました。

三日程で返事をもらい、翌週に電話インタビューを受けることになりました。「I社 + internship + phone interview + electrical engineering + grad student」など検索すると、多くの経験談を見ることができ、それをもとにアメリカ人の友人に練習相手をしてもらいました。私はボソボソ話すようで、はっきり話した方がよいと何度も何度も言われました。電話を通してのインタビューでは、一対一よりも複数で行うことが多く雑音が増えるため、たしかに聞き取りづらいものでした。

本番では練習の甲斐もあり、挨拶までは完璧でした。私が予想していた面接内容は、自己紹介+アイスブレイクから始まり、どうしてI社に応募したのですか、あなたの強みは何ですか、といったものでした。しかしながら、蓋を開けてみると自己紹介以降終了までの約一時間は電子デバイスの知識を問う質問に費やされました。私が応募したインターンシップのプログラムで扱うデバイスに限定せず、どちらかという基礎知識を広く抑えているか試されているようでした。実は、来年一月に **Qualifying Exam** という所属する学科の **Ph.D** が必ず合格しなくてはならない試験が迫っており、この試験は全て口頭で行われます。そのための準備として、友人と口頭で答える練習を繰り返していたので、ちょうどよく覚えていた知識を答えることができ、運よく次のステップに進めることが出来ました。

次のステップは面接でしたが、相手の口元が見える分だけ電話インタビューよりも楽でした。難易度の話が英会話の問題に変換されてしまうのは、私の英語に問題がある証拠です。さて、面接内容については電話インタビューとあまり変わらず、挨拶の後はホワイトボード前に移動して、ひたすらテクニカルな問題です。これは全てのプロセスが終了した後に知ったのですが、電話インタビューと面接を担当したのは、インターンシップ中に一緒に働く人たちでした。ひたすら技術に関する質問をされた理由にも納得がきました。日本でいうところの人事面接というものはありませんでした。

オファーを受けた翌週、こんなグッズが届きました。アメリカ人学生の必需品リュックサックにタンブラーやマウスが詰まっていました。



さて、11月最終週の現在は、研究と一月の **Qualifying Exam** に向けた勉強に追われる毎日です。一月に合格報告が出来るよう（落ちて退学にならないよう）、精一杯努力するつもりです。最後になりましたが、このような素晴らしい機会を与えていただき、船井財団の皆様には大変感謝しております。今後ともどうぞよろしくお願いいたします。